



雅歌 Gustave Moreau

「どうかあの方が、その口のくちづけをもって／わたしにくちづけしてください」(雅1:2)と、主人公の女性が「キスして」と迫る言葉で始まる雅歌はソロモンによる歌と記されています。聖書は恋多き男性ソロモンの一面を示したかったのでしょうか。男女の愛し合う姿を記したかったのでしょうか。「産めよ、増えよ、地に満ちて、地を従わせよ」(創1:28)という神の創造物語が完成するためには男女の sex が不可欠ですから、愛の交歓を描くことは神様の御心に適うことです。

最初に声を発する女性はシュラムのおとめですが、名前はありません。そして、あの方と呼ぶ相手も誰なのか謎めています。固有名詞が記されているのはソロモンだけです。登場人物はあなた、わたし、あの方など、代名詞だけが飛び交い、誰を指しているのが正確にはわかりません。ソロモンなのか、やがて登場する若者なのか、読んでいくうちに分からなくなるのです。あたかも、ト書きがなく、セリフだけで進行する劇のような感じがします。そのセリフも現実から、突如、夢、幻想の世界へと飛んで行くような飛躍が感じられ、戸惑います。

けれども舞台設定はソロモンの結婚式と思われ、シュラムのおとめは花嫁として迎えられます。彼女は自分を「シャロンのバラ、野のユリ」と自称しています。美しく野性味のある女性です。シュラムがどこかは分かりませんが、彼女は自分を日に焼けて色が黒いと言いますし、彼女が口にする夢の世界が、緑の茂み、リンゴの森、ぶどう畑、園、泉などですから、緑あふれる自然が出身地なのでしょう。シャロンはイスラエルの北西の平原で、シャロンのバラ(ムクゲ)は純潔の象徴とされていますので、つい、ダビデ王の最後の処女妻、この上なく美しい娘と言われたシュネム生まれのアビシャグを想像してしまいます。

不思議なことにソロモンとおとめだけではなく、恋人と呼ばれる若者も登場します。若者は野山をカモシカのように駆け回り、日焼けした逞しい男性で、羊を飼い、ソロモンのイメージとは大違いです。おとめと若者が自然の中で愛の交わりを満喫する場面が描かれます。恋しいあの方はわたしのもの／わたしは恋しいあの方のもの(雅6:3)と男と女の二人が一体となり、二人だけの濃密さを歌います。ところが、この若者がどこかへ行ってしまいます。おとめはただ若者が帰るのを待つだけなのです。そして、ソロモンとの結婚式に臨むという印象になっています。そうすると、「昔の恋人を忘れられない花嫁の歌」かのような、ありえない設定になり、戸惑います。

男が姿を消すというイメージは、妻にとって夫は一人でも、夫にとっては複数の妻が許されている古代社会の姿を反映しているのでしょうか。ソロモンは王妃が六十人、側女が八十人／若い娘の数は知れないが／わたしの鳩、清らかなおとめはひとり。(雅6:8)と記されています。ですから、妻がいても、男は新しい恋が始まれば、愛する人だけしか目に入らなくなり、称賛を捧げ、愛の交わりを求め、求婚するのです。また、ソロモンは権勢並びもない偉大な王であれば、花嫁を賛美すること、また、愛情表現を正直に告白することは、立場上、差しさわりがあるのでしょうか。年老いたソロモンは若者の唇に乗せて、愛の言葉を伝えているのでしょうか。

このとき、おとめはどのように寝床に伏せていけばいいのか。愛されることを激しく求め、愛を惜しみなく捧げ尽くし、我を忘れ、時を忘れ、夢の世界の中で、甘美さそのものに浸りきる、という愛の形を恋人たちは求めるのです。若者とソロモンが二重になって恋の言葉を響かせています。さらに豊かな隠喩、暗示が散りばめられていて、ドキドキします。